

「専攻の学びのコツは点から線へ」

堀田 隆一

(英米文学専攻教授、英語史)

いやあ、名文揃いの素晴らしいオンライン・ガイダンスでしたね。

とってはいられない立場です。三田の専攻教員 8 名によるリレー・エッセイのしんがりを務める堀田隆一です。皆さん、文学部英米文学専攻へようこそ、といてもすでに 6 月になってしまいました。本年度は春学期開始が遅れたとはいえ、今やオンライン授業という形態に良くも悪くも慣れつつある新 2 年生の皆さんに歓迎の辞を述べるには、少々蒸し暑い季節となってきた感があります。

2 年生の皆さんの多くとは、必修の「英語史」の授業で毎週（間接的に）お会いしています。また、3 年次春学期にはやはり必修の「古代中世英語学」の授業（古英語講読する授業）で毎週顔を合わせるようになります。ということは、皆さんと私は必修の講義とともに過ごす時間が割と長いということです。であるからには、英語の歴史的变化を追ったり、英語の古文を読み解いていくフィロロジー（philology）というこの分野——本専攻の伝統の必修分野であるばかりでなく、井上逸兵先生がエッセイで触れられた通り、英語圏の大学ですらめったに必修分野とされていないレアもの——との付き合い方を共有しておけば、お互いに過ごしやすい時間となりそうです。そこで、その参考になるよう、私がこの分野に関心をもったきっかけ、その学びから得られたものなどをお話したいと思います。

皆さんと同じように、私も英語を本格的に学びたいという思いで大学に入りました。英語で国際交流したい、世界の様々な情報を入手したり発信したりしたい、英語を身につければ自分の視野も無限に広がるだろうと夢を膨らませていました。一方、母語の日本語とはまるで異なる発音、語彙、文法、表現、発想をもつ、人生で初めて触れた外国語である英語そのものにも並々ならぬ関心をもっていました。新種の生物を発見したかのような好奇心をもって、英語という言語をじろじろ眺めていたわけです。

大学では英米文学や英語学などを必修として学びましたが、カリキュラムには英語史という科目もありました。最初は特におもしろい科目とも思わなかったのですが、学習を進めていくうちに、そこを基点に大学で学んでいた英語に関する様々な知識がつながっていく感覚——ある種の快感——が生じてきました。英文学、米文学、英米史、英詩の形式、音声学、統語論、その他諸々の授業で学んだ点の知識が互いに結びつき始め、線となっていく「有意義感」とでも呼ぶべき感覚です。

英語史を通覧しようとする、当然ながら異なる時代の事情に触れることとなります。また英語の歴史の舞台も、イギリスから始まりアメリカへ、そして世界へと広がります。英語の変化を追うとなれば、発音、語彙、文法など様々なレベルにアンテナを張っておく必要があります。用いる「文献」としては、比較言語学で再建された（本当に存在したかどうかともわからない）理論的音形、ルーン文字で書かれた最古の碑文、写本に書か

れた中世文学、印刷された近代文学、20世紀以降は録音された音声資料、電子化されたコーパス、そして現在生で使用されている英語の証拠などバラエティに富みます。英語史は、専攻のカリキュラムで用意されている多くの科目を概観し、互いを線で結びつけていくのに良いポジションにあるのだらうと思います。

その後、興味をもったフィロロジを追究しようと大学院に進学しましたが、それまでに蓄積していた線が徐々につながって面となり始めました。英語に限らず言語というものがおもしろくなり、英米史にかかわらず世界の歴史がおもしろくなりました。やがて面は立体（多分いびつな形ではあると思いますが）へと進化しつつ今に至りますが、今後もさらに多次元化していくのだらうかと想像するとワクワクです。

結局のところ英語史の研究を通じて分かったことは、点がつながっていくと何でもおもしろいのだということです。これは、古い英語を読めるようになったり、それによって現代の英語を深く理解できるようになったり、また英語を日常的に使いこなせるようになったことよりも、ずっと重要な気付きだったと思っています。私の場合は、たまたま大学での学びの入り口が英語であり英語史だったことになりませんが、本当はきっかけとしては何でもよかったのかもしれませんが。皆さんも（個々の動機はあるにせよ）たまたま本専攻に入ったわけですので、本専攻で開講されているたまたま関心をもった分野の授業を基点にして視野を広げていってもらえればよいと思います（ただし、前述の通り、英語史はそのための基点として割とお薦めなのです）。本専攻での学びのコツは、各授業で見えてきた点をつなげていくこと、そして線を育てていくことです。これを念頭に置くだけでも、専攻での日々の学びの「有意義感」が段違いに増すはずですよ。

本来であればリアル・ガイダンスで各々の分野を担当する三田の専攻教員8名が揃った姿を皆さんにお見せしたかったところですが、それでもこのオンライン・ガイダンスのリレー・エッセイを通じて、皆さんのなかで個々の教員という点のイメージだったものが専攻を表現する線のイメージに近づいたのではないかと思います。これをさらに面のイメージへ進化させるには次元の飛躍が必要となります。

ということで、専攻としてリレー・エッセイの2次元化に挑みます。え、リレー・エッセイの2次元化？ 次は誰？ 知りたい、知りたい。

どうぞお楽しみに。 (2020/6/1)